中沢小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 4 ～ 6

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業づくり	(1)子どもが自ら調べたくなる、考えたくなる、話したくなる課題の設定や展開の工夫をする。 (2)誰もが安心して学ぶことのできるよう、ペアや小グループでの話合いを大切にした授業展開を行う。 (3)各教科・領域で、身につけさせたい資質・能力を意識した授業力の向上を目指す。 (4)昨年度に発掘した魅力的な地域の材を共有し、各教科・領域の学習で活用していく。	・子どもたちが安心して学習に取り組み、友達と関わり合って学ぶことができるよう、日々の学習の中にペアや少人数でのグループ活動を設定した。 ・重点的に取り組んだ総合的な学習の時間や生活科については、昨年度の記録を活かしたり、課題の設定の仕方やまとめ方についての研修を行ったりして、それぞれの学級で特色ある授業を行った。	B
豊かな心	(1)ペア活動・たてわり活動での異学年交流を通じて、相手を思いやる心を育てる。 (2)音楽活動や学校行事等を通じて、友達と同じ目標に向かう良さを実感できるようにする。 (3)子どもたちが個性を認め合いながら、居心地の良い学級・学校づくりを目指せるようにする。 (4)地域や関係機関との「ひと・もの・こと」とかかわり合いながら活動する良さを実感できるようにする。	・集会活動やたてわり活動では、高学年と低学年が関わる活動を通して相手意識を高められていた。 ・音楽集会や運動会、体験学習では、グループ活動や見合いをすることで共に高め合う良さを子ども達が実感できていた。 ・生活科や総合的な学習では地域の方や施設等との交流を通して、関わり合うことの大切さに気付いていた。	A
健やかな体	(1)「食」の大切さや、食に関する興味・関心を高める食育の推進を行う。 (2)元気アップタイムや学校保健委員会の取組を通して自己の健康に対する意識の向上を目指す。 (3)身につけさせたい資質・能力の向上を図るための体育科学習を充実させる。 (4)運動委員会や集会委員会による取組や集会活動による健康体力の向上を目指す。	・元気アップタイムや学校保健委員会では、自身の健康課題を意識できるよう実態に合ったテーマを設定した。また、学びを生活に生かせるよう振返りを取り入れた。その結果、自身の健康を保つために大切なことを知り、食生活などに生かすことができた。 ・運動委員会の「なわりンピック」集会を通して、音楽に合わせて様々な跳び方に取り組むことで、体を動かす楽しさを味わうことができた。	A
地域とともに歩む	(1)地域・防災科や、地域・防災科に向けた1～5年生の学習活動を充実させる。 (2)日々の学習や総合的な学習の時間で、子ども達が地域とのかかわりを意識化できるようにする。 (3)地域や社会の多様な人たちとの出会いを通して、自らにできることを考えられるようにする。	・校内重点研修として今年度も生活科と総合的な学習の時間に取り組み、見通しをもって計画を立てることで、効果的に地域の材を活用した。多様な人たちとくり返し関わることで、新しい気づきが多くあり、相手の思いに深くふれることができた。	B
いじめへの対応	(1)居心地の良い学級、学校づくりに努め、いじめの未然防止を図る。 (2)教科分担制など複数の教職員による児童理解に根差した支援体制で、早期発見・対応につなげる。 (3)いじめにあった児童の心のケア、意向に寄り添った対応をする。状況に応じ関係機関と連携し、適切な指導、支援を構築する。	・小グループ等で、友達と対話することを通して、関わり合いをもち、安心して学校生活を過ごすことにつなげられた。 ・いじめの校内の状況については、全教職員で共通理解を図った。児童理解が深まる研修を設定し、子ども達とのかかわりについて見つめ直すようにした。 ・不安を抱えた子どもや保護者の思いに寄り添いながら、児童支援専任を中心として、組織的に対応してきた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	(1)メンター研、中堅教員研修等の校内研修時間を確保する。 (2)校務分掌を少人数化し、責任の明確化と意思決定のスピード化を図る。 (3)学年支援、学年担当教員を割り当て、チーム学年経営を推進する。 (4)キャリアステージに応じた先輩教員による、ミドルリーダーや主幹教諭候補の育成を行う。	・メンター研では、職員同士のコミュニケーションを深めながら、意図的計画的に学級経営や授業づくり等について研修をし、支え合う雰囲気づくりに繋がっていた。 ・校務分掌では、役割分担を明確にし、時間を有効に使って会議を進めてきた。また、働き方改革の意識も昨年度より高まった。 ・主幹教諭と学年主任や指導部主任が連携しながら学校運営に積極的に関わり、リーダー育成を進めてきた。級外の職員も学年経営に責任をもって携わった。	B
小中一貫	(1)9年間で育てる子ども像を中学校と共有し、小中の職員が合同で授業研究や研修会を行う。 (2)小中合同の児童生徒交流会を行う。 (3)中学との円滑な接続に向け、中学校教諭によるリード授業(6年図・理・音)や英語科教諭による外国語科授業(5・6年通年)、数学科の先取り授業(6年)を行う。	・小中合同の授業研究会では、小中で同じ教科の授業を公開し合うことで、発達段階に応じた授業の在り方を学んだり、教科を通して9年間で育てる子ども像について共有したりした。 ・児童生徒交流会では、4年生以上の小学生と中学生が交流することで、子どもたちの生き生きとした姿や温かな関わり合いが見られた。	B
地域学校協働活動	(1)地域学校協働本部を活用し、地域と学校の連携を強化する。 (2)地域の方たちによる登校の見守り(学援隊)について協議し、安全対策の充実を図る。	・CSCコーディネーターと担当者が連絡を取り合ったり、生活・総合でつながった人材を校内で共有したりすることで、連携を意識して取り組めた。 ・通学路を変更したり、学援隊の方々にも協力してもらったりし、より安全に登校できるようにした。	B
児童指導	(1)スタートプログラムを取り入れ、進学、進級時の人とのつながりを丁寧に確保する。 (2)YPアセスメントなどで学級の実態に応じた社会スキルを設定し、認め合う学級集団づくりにつなげる。 (3)日常の場面や人権週間など、様々な立場の人の思いや考え方にふれ、人権感覚を高める。 (4)年2回のアンケートで子どもと個別の教育相談を実施し、子どもが安心して学校生活を送れるようにする。	・環境の変化が著しい4月や長期休業明けの時期に、ゆとりある学級開き等を校内で共有しながら進められた。また、子ども同士や教師とのつながりをもてるようにした。 ・職員会議等で、子ども達に身に付けてほしい社会スキルを年間で見通して設定した。学級内における自己効力感や自尊感情などを確かめながら、必要に応じた活動や指導を取り入れた。 ・アンケートを年間2回設定し、話を聞く時間を作り一人ひとりと対話をしたことが安心して過ごすことに繋がった。	A

ブロック内評価後の気付き	小中共にあゆみの所見が無くなり、学校側としてはあゆみの文章よりも顔を見て話ができる面談を活用して子どもの様子を伝えていく方向で考えている。中学校の期末テストが無くなり、日頃の学習状況を評価していくように変化してきているが、保護者や地域の方々にとってはまだ馴染みがない。こういった情報を発信していくと共に、保護者と学校がよりコミュニケーションをとっていく必要性を感じた。
学校関係者評価	小中一貫の取組に関しては、昨年度と同じようにもっと保護者に伝わりやすい活動があってもよいのではないかというご意見が出た。中学校の先生が小学校で授業を行うことで、小中共通での子ども理解につながり、子どもにとって得るものはあっても、保護者にはどうしても伝わりづらいので、取組として積み重ねてきたものが見えるようになるとなおよい。また、タブレットを使った学習も、ICTの良さと課題を踏まえたうえで活用されていて良いという評価をいただいた。

中期取組目標振り返り	○総合的な学習や生活科では、昨年度の経験を活かし、それぞれの学級で子どもたちの興味・関心にそった特色ある学習が展開された。 ○地域行事が復活したことや、CSCコーディネーターを活用することで、より地域の方々との関わりが増え、学習にも深まりが見られた。 ○小中一貫の取組については、児童生徒交流会を通して、小学生と中学生が温かな関わりをもつことができ、今後も継続していきたい。